

移民第二世代は学校経験をどう語るか（４）

－ペルー系ニューカマーの事例－

静岡県立大学 角替弘規

1. 目的

従来日本における南米系ニューカマーの研究においてはブラジル出身者が主たる対象として扱われることが多く、「南米」という大きな括りの中であってブラジル以外の南米諸国の出身者の特徴はあまり明確に示されないままにある。そのような中、Takenaka (2009)は日系ブラジル人と日系ペルー人の比較を通じてかれらのエスニックアイデンティティのあり方に両国間の優劣関係が影響していることを指摘し、それぞれのニューカマーの背後に控える出身国の様々な文脈が日本社会への適応のあり方に影響を及ぼす可能性があること示唆している。それは同時に出身国別にホスト社会への適応のあり方を分析する必要性を示している。

そこで本報告ではペルー系ニューカマー第二世代の学校適応の特徴を明らかにすることで、ブラジル系との比較においてどのような異同が見られるのかを明らかにすることを目的とする。この目的を達成するために以下の研究課題を設定した。一つ目はかれらの学校経験に関する語りに注目し、かれらが日本の学校教育においてどのような困難を抱えたのかを明らかにすること、二つ目にはそうした困難をかれらがいかに克服したのか、あるいは克服できなかったのか、その原因とともに明らかにすること、三つ目にそうした経験がかれらの進路形成にどのような影響を与えたのか解明すること、である。

2. 対象と方法

ペルーにルーツをもつ19歳から30代の若者20数名に対して半構造化インタビューを行った。対象者のうちおよそ3/4がペルー生まれであるが、日本の小学校に1年生の段階から就学している者が半数を占める。また親世代のほとんどが出稼ぎを目的として来日している。

3. 結果

ペルー系ニューカマー第二世代が自らの学校経験を語る中で一つの特徴として示すことができるのは、自らの外国人性を周囲の日本人に対して積極的に表出しようとしめない点にある。特に外見上日本人と大きな区別がつかない場合には、ペルー人であることを自ら表明することは少なく、またそうでない場合にも自らの外国人性を積極的に示すことは避けられていた。こうした傾向は特に女性において強く見られた。

もう一つ指摘できるのは、かれらの学校適応において日本語習得の度合いが極めて大きな要因となっていることである。日本語習得に成功すれば学習意欲が保持され、また周囲の友人との関係も良好なものとなる可能性が多くある一方、逆に日本語獲得が難しい場合には授業内容の理解が困難となり、周囲の友人との関係も希薄なものとなりがちである。同時に日本語での対応がうまく取れなかったことをきっかけにいじめを受ける事例も散見された。

ペルー系ニューカマーの場合、出身国との行き来が頻繁に行われることは少なく、日本の学校教育からドロップアウトした際に代替となるペルー人学校や通信教育を通じての教育資格の取得といった手段が有力な選択肢となっていない。すなわち日本の学校適応が困難である場合、かれらにはそれに代わる教育資源の選択肢がほとんど存在しないということにも留意したい。

文献

Takenaka, A. (2009) 'Ethnic Hierarchy and Its Impact on Ethnic Identities: A Comparative Analysis of Peruvian and Brazilian Return-Migrants in Japan' in Tsuda, T. "Diasporic Homecomings" Stanford Univ.

謝辞 本研究は科学研究費補助金基盤研究（B）26285193の助成を受けたものである。